

図書だより

〈第37号〉
平成9年10月31日
呉工業高等専門学校
図書委員会



世界遺産 原爆ドーム (旧広島県産業奨励館)

チェコの建築家ヤン・レルルの設計によるもので、展示・文化施設として用いられていた。1945年8月6日原子爆弾により被爆、廃墟となったが、崩れた煉瓦壁体の上に残る鉄骨造のドームが被爆を象徴するものと見なされるようになり、原爆ドームと呼称されるようになった。1967年、1986年に保存工事がされ、1996年世界遺産に登録された。

目次

【巻頭文】

「電子図書館」 校長 長町 三生 2

【読書感想文】

「鉄道員(ぼっぼや)」: 第117回直木賞受賞作品 M2 矢野下寿満子 3

「最後の零戦」を読んで E1 石中 貴 4

「トットちゃんとトットちゃんたち」を読んで E3 井上 健太郎 5

【新任教職員の随想】

「ふと立ち止まって考えさせられる瞬間」 一般科目 能登原祥之 6

「読書のすすめ」 電気工学科 藤井 敏則 6

「読書のすすめ」 事務部長 福永 淳 7

「読書のすすめ」 会計課長 坂本 正 7

【留学生・一般利用者随想】

「留学生に聞く」 A4 マフシド・パニアニ 8

「英字新聞が愛読誌」 一般利用者 水谷 貞夫 8

【在外研究員だより】

「マンチェスターの図書館」 建築学科 篠部 裕 9

【新着図書10選】

..... 10~11

【お知らせ】

図書館ホームページからのリンク更新について 11

図書館入退館システムの導入について 12

【編集後記】

..... 12

巻 頭 文

電子図書館

校長
長町三生



従来の書籍（ブック）を中心とする図書館を「紙メディア図書館」と名づければ、電子図書館は「図書のような情報をデジタル化してネットワークを介してデジタル情報にアクセスできる図書館」であるといえる。

電子図書館は1991年に提案されたN I I構想で技術的基盤が確立され、以後世界で話題になった。わが国では、①学術情報センター、②奈良先端科学技術大学院大学、③長岡技術科学大学などが電子図書館化を構想ないし進行中であり、国会図書館関西分館でも構想中という。また京都大学及び広島大学など数大学が平成9年度の電子図書館関係予算を獲得している。

電子図書館のデジタル情報というのは、書籍あるいは雑誌の文字及び画像情報をコンピュータ内に取り込み、外部からその目次・内容等（コンテンツという）を引き出したり、必要文献を検索して便宜を与える機能をもつ。このためにマンパワーを含めて莫大な経費を必要とするので、すべての大学がこの機能をもつことは不可能に近く、わが国では、ほんの数ヶ所の施設が電子図書館機能をもつ程度しか考えられない。これらを拠点として外部施設が利用することになる。

平成8年度の高専協会理事会より高専も電子図書館化を重要課題の1つとして検討するように建議された。

現時点での電子図書館機能の進行状況は、次のとおりである。

(1) 学術情報センター

ここは、特に学術雑誌を中心に電子情報化をすすめる構想であり、1997年4月より無料サービス

を開始しており、98年度からは会員制による利用（有料化）を考えている。そのための設備及び要員を擁している。

電子情報化のためには相手学会の許諾が必要であり、本年5月時点でわが国の14学会から許可をえている状況である。これらの学術雑誌に関しては、キーワードによる論文検索、目次コンテンツ、全文検索及びコピーも可能である。

図書に関しては、全国大学及び高専の3,000万冊の総合目録データベースが完成しており、探す図書がどこにあるかが瞬時にわかる。

(2) 奈良先端科学技術大学院大学

当大学図書館は平成8年4月に設立。学内利用のための新しい図書館をめざし、電子図書館構想を固めた。現時点では140種類の学術雑誌・一般雑誌の許諾をえ全文検索が可能となっているが、学内利用のため情報処理やバイオ等の雑誌が中心となっていることと外部からの検索・コピーはいずれも不可能である。ただし目次だけは検索可能だがコピーはできない。奈良先端大のためのみと考えてよい。

(3) 長岡技術科学大学

約14,000タイトルについて目次コンテンツのみ検索・コピーが可能である（会員費10万円程度／年）。

呉高専として今後どうするがであるが、少ない図書予算しかない本校としては全面的電子図書館化はムリである。但し、ユーザーとして本校教官・学生の便宜の向上を図らねばならない。

①CD-ROM等の情報利用を今後とも向上させる。②研究報告書及び公開講座テキスト等学術上有用な情報を高専全体でまとめて公開しネットワーク化する。③各研究室から情報検索が可能となるようにする。

呉高専に電子図書館化プロジェクトチームが発足しており、いずれ有意義な回答がなされる。それを期待したい。

読書感想文

「鉄道員（ぼっぼや）」
（第117回 直木賞受賞作品）
（浅田次郎著）

機械工学科2年
矢野下 寿満子

鉄動員を“てつどういん”と読むと、少し堅苦しい感じがする職業にきこえるけど、“ぼっぼや”と読むとなんだか昔のあたたかい人情があふれた感じがきこえてきます。ぼっぼや“ぼっぼ”というのはSL機関車が鳴らす汽笛のあの“ぼっぼー”という音のことです。

ぼっぼやという響きから、ほのぼのとした田舎の駅員というイメージを持っていました。しかし、田舎でSL機関車の誘導と駅長を務めるという仕事は私が想像していたものとは全く違う厳しさがありました。北海道の冬、雪が降る零下2度の中、たとえ機関車が遅れても動くことなく外で機関車を待っている、これはいくら仕事とはいっても、そうみやすくはありません。政治家のように目立つ仕事ではないし、医者のようにいつも人から感謝されることもあまりない仕事なのにひたむきに自分の仕事をがんばりぬいている姿は、すごくかっこよく、憧れもしましたが、反面仕事のために、娘の死も、妻の死に目にさえもあわなかったことに、そうまでしなければいけないような仕事なんだろうかと思いました。自分の家族の死よりも、ただ旗をふって機関車を誘導することの方が大事なんておかしいと思いました。仕事の事しか考えず、家族の事はほったらかしという、薄情な人に映りました。しかし、娘の死や妻の死をとて悲しんでいながらも、決してあの時、機関車を誘導するという自分の仕事を放り出さず、娘や妻のところへ行かなかったことを、後悔していないというのは、驚きもしたし意外でした。普通は、自分が仕事を選んでしまったことをすごく悔やんで悔やんで悔やみ抜くものだと思っていたのが、まるっ

きり違っていました。

家族と仕事のどちらが大事という考えよりも、“自分はぼっぼやなのだから、機関車に乗っている人達は、自分が機関車を誘導しなかったらどうなるのだろう”という思いがあり、またそれを後悔していないというのは、“ぼっぼや”という仕事に対する誇りをもっているんだと思いました。自分がしてきたことに悔いがないというのは、どれだけ仕事にひたむきな思いを持っているかというのが分かります。

たとえ、どんなに人に気付かれない、目立たない仕事だとしても、それをやり抜き、誇りを持つということは、だれにでもできるというようなことではないと思います。私にとっては、あきらめずに自分が探し求めていた物を見つけて、歴史に名を残した冒険家と、自分がやることに誇りを持ち、悔いを残さないで、ひたむきに生きるひとはどちらも同じくらい、難しくすばらしいひとだと思えます。

ぼっぼやに、死んだ娘が自分の成長の過程を見せて、結局次の日にぼっぼやは死んでしまう…。死んだ時までぼっぼやは手に旗を持ち、駅のホームで死んでいたというのは最後まで自分の仕事から離れることができなかったんだと思いました。

ぼっぼやという仕事に生きて、ずっと思っていた娘に迎えられて死んだというのは、すごく幸福な人生だったんじゃないかと思いました。自分のやりたいことが見つけれない人だっているのに、悔いなく自分の人生を歩めたことを、私は感動もしたし、うらやましく思い、そして目標のようなものも持つことができました。自分もこんなふうになら、たとえ他人から見たらどうでもいいようなことでも自分がこれだ、と思ったら誰にもできないくらいに、一生懸命それに取り組んでいけるようになりたいです。他人から何か言われるのを恐がって、自分がしたいと思っていたことをしなかったことが何度かあったけど、後に残ったことは後悔だけでした。

ぼっぼやのように、後悔せずに自分の人生を送ることは難しいけど、少しでもそれに近づきたいと思いました。

「最後の零戦」

(白浜芳次郎著)

電気工学科1年

石中 貴



この著者は昭和15年から終戦まで、飛行機に乗って戦い続けた人物です。

この人は零戦乗りとしての腕もさることながら、生き残るという使命を受けて、何か見えない力に護られて現代まで生き着いたのではないかと、そう思えます。

それほど熾烈で過酷な世界がこの本には描かれています。

物語は日本の快進撃が止まり始めたとき、昭和18年12月から始まります。

著者、白浜海軍飛行兵曹は第一航空戦隊へと配属されますが、ラバウルで必死で戦っている機動部隊だけに、飛行機の不足は著しく、訓練もままならない状況でした。当時の国家の状態もこのようだったのではないのでしょうか。

以後、白浜兵曹は南のフィリピン・マレーシアを中心に何度も危険な目に遭いながらも零戦を駆り続けます。

あの虎の子の20ミリ機銃が故障し、残る7.7ミリ機銃2門も不調ですぐ止まってしまう。そんなときグラマンF6F、あのヘルキャット8機に囲まれたら…。絶体絶命、普通はすぐやられるでしょうが、この人は向こうが20ミリ機銃を恐れていることに気づいたのでした。機首を相手に真っすぐに向けると相手は急いで逃げようとするのです。それを利用してなんとか逃げ切った訳ですが、20ミリ機銃の威力と、何より1対8の空戦を可能にしたパイロットの腕と零戦の運動性。最強の戦闘機と呼ばれた理由がよく分かりました。

しかし、日本は追い詰められ、特攻隊が編成されます。若い兵士たちは競って立候補したそうです。選ばれなかった者は上官に不服申し立てまでしていたそうです。

その先にあるのは唯一つ死のみ。名誉も名声も命あってのものはずなのに、母国のためにと先を争って死んでゆく若者達。こんな異常な国に誰

がしたのでしょうか。一体いつ、どこで進む道を誤ったのでしょうか。

さらに昭和20年8月15日。この日残り300機程の飛行機を総動員して無茶な作戦が行われる予定でした。まず制空隊として出撃し、道を開いた上で、250キロ爆弾を積んで特攻機として再び出撃し玉砕するというものです。しかし出発直前、終戦の大詔は降下されたのでした。

普通なら—この普通が当時通用しないのは重々承知の上ですが—終戦まで生き着いたことに喜びを感じると思いますが、搭乗員の言葉には「やりきれない」「もう1時間、時間がずれていたら」というのがあったそうです。この人達は何を悔やんでいるのだろうと考えてみると、どうも日本の敗戦を悔やんでいるのではなく、自分が出撃できなかったことを悔やんでいるようです。たとえこの作戦が成功しても自分達は皆死に、日本の絶対的不利は変わらない。そのことを知らなかったとは思えません。つまり、母国のためと言って、死ねなかったことを悔やんでいる…。

偏った見方かも知れませんが、僕はこう受け取ることも出来ると思いました。これは明らかに今から見て異常でしょう。作者はこれを「国家の安泰を願って散って行った。国家権力者や資本家にだまされて殺されたというのは冒瀆だ。」と書いていますが、国家の安泰を願うがため、戦場に散ったこと自体が何か間違っているような気がしてなりません。それは教育から、長年培われてきた国民性からいろいろな要素から形成された精神、ものの考え方だったのでしょうけれど。

では、日本が太平洋戦争を起こしたこと、敗戦したこと、そしてずいぶん遠まわりをして、やっと平和を手に入れたこと。これは、日本人の精神からして、起こるべくして起こったことなのでしょうか。

このことについて考えるには、もっと沢山の勉強が必要だと思っています。

その時代に生きてなかった人間が、どんなに考えて答えを出したところで、何の解決にもならないかも知れない。けれども、次の世を造る人間が過去から学ぶことを忘れなければ、間違った方向へ進むことはないのでは、と僕はこう思っているのです。

「トットちゃんと
トットちゃんたち」

(黒柳徹子著)

電気工学科3年

井上 健太郎



いつもは目を通すだけ、というより下の方の週刊誌の広告をみるだけで通り過ぎてしまうページ、新聞をあたまから2、3枚めくったところにある国際面をしっかりと読んでみた。1週間分くらいの記事を読んでみると、「どこの国の首相が解任」、「たばこ会社の社長喫煙による害を認める」、「クリントン大統領ゴルフ・スコア80突破ウソ疑惑」……、などが書いてあった。興味ない記事が多い中で、「トットちゃんとトットちゃんたち」を読まなかったら目にとまらなかった記事があった。例えば、8月24日の新聞に、「国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は22日、ルワンダ北西部のムドゥンデ難民キャンプが21日夜、武装集団に襲撃され、同キャンプにいたコンゴ民主共和国（旧ザイル）のツチ族難民107人がなたなどで殺されていたことを明らかにした。」とあった。「襲撃してきたのはおそらく……」とも書いてあった。

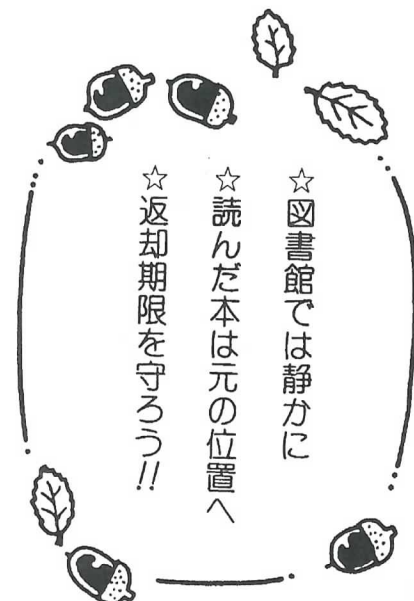
ルワンダは、かつてアフリカの「スイス」と呼ばれるくらい、緑も多くきれいな国だった。そこには2つの民族、フツ族とツチ族が暮らしてうまくいっていたのだが、対立が起きはじめ、1994年4月6日、フツ族の大統領が殺されてから、フツ族によるツチ族の虐殺が始まった。そこから内戦が起これ、報復をおそれたフツ族の人達が難民となって隣国のザイルへ逃れていった、というのがルワンダの悲劇である。

ルワンダ以外にも戦争や内戦、干ばつや洪水などの自然災害で、貧しく飢えている国は世界の大半であり、そういう国で1番被害にあっているのは何の罪もない子供たちである。1年間で千数百万人の5歳未満の子供が死んでいるという。この本を読んで日本がいかに平和か、平和で豊かな国がこの世界のほんの一部にすぎないのだとわかった。

考えさせられたのは、この状況をいかに改善するかの1点である。裕福な国に住んでいても1個人には限界がある。戦争や内戦をやめさせるには、国際的な力でないととても無理だと思う。それ以前に僕が理解できないのはどうして戦争をするのかだ。人を殺さなければ生きられないのなら自らの死を選んだ方がまだ、というのは今平和で明日殺される心配のない人がいえる理想論にすぎないのか。さらに究極的にいえば、世界中の国の軍事予算をやめればいいのだろうか、それは絶対に無理だろう。

結局、僕たちは身近なことからはじめるしかないだろう。物を節約するとか、出された食事はすべて食べるとかいろいろある。しかしそれは間接的なことだ。直接的なことといえば募金などだろうか。「善意」が大切といわれるが、それでも1円玉を一つだけ募金する人とかは何を考えているのか理解に苦しむ。

この本を読んで真実を知ることができた。が、それは今僕がやるべき最低限のことだが、知識が増えても何の役にも立てないだろう。自己嫌悪に陥ったが、「この本の印税の一部は、ユニセフ駐日事務所を通して、子どもたちのために使われる」とあり、それが少し僕の救いになった。



新任教職員の随想

「ふと立ち止まって 考えさせられる瞬間」

一般科目
能登原 祥之



“短く、想像力が自然と働き、次々読んでしまうもの”から読書を始めると、忙しい場合でも“ふと立ち止まって考えさせられる瞬間”を毎日楽しめるようになります。今回は個人的な体験ですが1例として、この夏思わずのめり込んだ本を簡潔にご紹介します。

初めは和書。小林秀雄『考えるヒント』シリーズです。比較的短く、いろいろなテーマについて彼独特のぴりっとしたタッチでエッセイが綴られています。「考える視点、きっかけ、ヒント」なるものをこの本から学ぶことができます。この類でもっと身近な書き物に、新聞に掲載されている『投書欄』があります。「そうそう」と思わず独り言が出たりする時もしばしばです。お試しあれ。

次はSFの古典 H.G.Wells の有名な作品『タイムマシン』『透明人間』です。「科学技術が進むと、人間が○○になるのでは」という彼独特の「大胆かつ暗的な仮説」が結構面白くて、感慨深いのです。気が付くと、現代のある側面が彼の予言通りになっている?! 不思議な小説です。

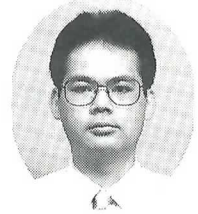
最後に探偵物。『ゴルフ場殺人事件』『そして誰もいなくなった』『ABC殺人事件』『オリエント急行殺人事件』などなど。かの有名なミステリーの女王 C.Agatha の世界です。続々と様々な人物が登場しては、怪しい微妙な人間ドラマを繰り広げます。そして、“突然、殺人事件が!?”。人間の心理描写が細かに綴られているので、その巧みな描写に惑わされ、誰が犯人か分からずに最後の結末まで読み進んでしまいます。名探偵 Mr. Poirot, Ms. Marple の奥深い推理と明快な説明を理解すると感動と悔しさを覚え、次から次へと彼女の作品に熱中してしまいます。

上記のような作品をこれからいろいろ探し歩い

ては、「ふっと立ち止まって考えさせられる瞬間」を大切にしていきたいと思っています。いい本があれば紹介してください。よろしくお願いします。

「読書のすすめ」

電気工学科
藤井 敏則



私は高校生時代まで読書はあまり好きではありませんでした。たぶん、それは自宅が散髪屋でマンガが身近にあったことと、部活や受験勉強のために精神的な余裕が無かったことが原因でしょう。その後、大学も無事合格し、大学に入学しました。しかし、私にとって大学は、なにかボーっとしているような、退屈なところでした。高専の授業と違って、大学の授業は出席をとれば、自己の責任において、教室で何をしてもかまわないというようなところがあり、授業とは全く別のことをする者、さっさと教室を出る者などがいました。

私の友達は授業中にひたすら本を読んでおり、この友達の「この本おもしろいよ」の一言で、退屈していた私に読書の面白さを教えてもらったのです。夏休みに入り、更に暇になったので、古本屋に行っては本を買ってきて、1日2~3冊の本を読んでいました。とはいっても難しい本を読むのではなく推理小説、SF、ハードボイルド物が好きでしたが。

そうこうしている内に4年生になり卒業論文を書く必要に迫られました。学術論文を読むのも読書の内かどうかという議論はさておき、斜め読みに慣れてきた私にとって、一言一句、噛みしめるように読む学術論文には、手を焼きました。他人が書いた文章を理解することや、他人に理解できるような文章を書くのは大変なことというのが、ここで、ようやく分かってきました。

他人の考えを正しく理解したり、自分の考えを正しく他人に理解してもらうには、正しい日本語の能力が必要です。しかし、いきなり何の知識も

ない状態で、対等に会話や文章のやりとりはできません。何らかの知識や経験が必要となるのです。そこで、読書により日本語の能力を向上させ、知識、疑似体験を得て、想像力豊かにしようではありませんか。

「読書のすすめ」

事務部長

福永 淳



本年4月に北九州市にある九州工業大学から転任して参りましたが、丁度、10年前に本校と設立同期の宮崎県の都城高専に庶務課長として在職し、図書館業務も多少経験いたしました。

そこでも図書館の利用者数の向上に、図書館職員を始めとして関係の教職員が躍起となっていたのを思い出します。

本校の利用者数を平成8年度で見ると学生800人に対し、年間利用者50,159人。一人当たり利用回数約62回、教職員115人を加えると約55回と年間52週間で、一週間に一回強の利用ということになる。

これにより、現在の貸出規則により最大の利用冊数を計算すると在学5カ年で884冊となる。

平成8年度末の蔵書(図書のみ)73,756冊の約1.2%である。又、昨年度の購入図書の1,448冊にも至らないこととなる。

一方、学生用図書購入費も年間約270万円程で学生一人当たり約3千円強である。この他維持経費も多々使用しており、利用すればするだけ、高価な図書も、設備投資も割安となります。

図書に限らず、図書館施設の効率的な利用も、独自での自習に、時間待ちに、気分転換に、静かに利用するのであればグループ研究・打合せにも利用しては如何でしょうか。

さて、いただいた本題に関連して、私の記憶にある図書を推薦いたします。

「白い牙」(新潮文庫) ジャック、ロンドン著 白石佑光訳、新潮社発行。

「読むくすり」 上前淳一郎著、文芸春秋社発行。前段の図書は、高校時代に読み感銘を受けたも

ので、狼の生態描写が印象深く鮮明に記憶にあります。又、後段の図書は、現在までに30巻近くが刊行されている。週刊誌掲載のコラムを中心に編纂した、アイディア、データ、情報の宝庫とも言う内容で短時間で楽しめるものである。

「読書のすすめ」

会計課長

坂本 正



「読書のすすめ」と題して書ける程の読書歴はありませんが、記憶にある範囲内で「本」との関わり合いを紹介します。

私が「本」と認識して読んだのは、昭和26~7年頃の小学校2年生頃と思います。姉のお下がり、厚さが3センチ位あったでしょうか。今思えば紙の材料が悪かったのでしょうか。更紙の様な紙に印刷してありました。その本のタイトルは、「心に残る人々」と言う短編集で、その中で印象に残っているものは、十和田湖にニジマス?の放流に成功した人の苦労話と、「ヒデオアサダありがとう」と言う物語です。

後者は、第二次大戦後のアメリカでのお話で、旧敵国のアメリカ人の輸血の提供者になり、一命を救い、周囲の人々から称賛を浴びた朝田英夫の物語です。私はこの二編に感激し、また、今の様に読む本も十分でない時代ということもあり、この本を何回となく読み返したものでした。

次は、小学校の4年生の頃でしょうか?ある菓子メーカーの「おまけ」として、「○○○文庫」と5枚のカードを揃えると、一冊の文庫本が貰えると言うサービスがありました。私は、転校を何度か経験しておりますが、ある地域では「文」のカードに希少価値があり、ある地域では「文」のカードが潤沢であることを発見し、地の利と人の和を生かし、友達とこれらを交換し、多くの「○○○文庫」を集め、貪るように読んだ記憶があります。

今は読もうと思えば幾らでも「本」が読める時代です。読書の良さを言い尽すことは出来ませんが、人の心を豊かにしてくれる「読書」をお勧めし、これを機会に自分も良書を選び、じっくりと「読書」をしたいと思っております。

留学生・一般利用者随想

「留学生に聞く」

建築学科 4年

マフシド・バニアニ
(イラン出身)

今回は、図書館をよく利用しているイランからの留学生のマフシド・バニアニさんにお話を伺いました。

館長：イランで小学校、中学校、高校を過ごしたわけですが、図書館はどのようなものでしたか。

マフシド：校舎の中にあって、靴を脱いで入る形式で、なぜか必ず隣りにお祈りする部屋がありました。

館長：良く利用しましたか。

マフシド：ほとんど利用しませんでした。

館長：何故ですか。

マフシド：図書館はとても静かですぐ眠くなるから。だから必要な本は自分で買ってました。

館長：どのような本を読んでいましたか。

マフシド：ダニエル・エスチールやアガサクリスティエーの本を良く読んでいました。

館長：本校の図書館にもありましたか。

マフシド：はい、ありました。デシリー（フィリピンからの留学生）さんも読んでいました。

館長：本校の図書館は利用しているほうですね。

マフシド：友達とレポートをいっしょにするために良く利用します。それと、インターネットやメールを良く利用しますので土曜日にも図書館へ来ます。また、LDがあって映画も良く見ます。

館長：図書館への注文がありますか。

マフシド：日本語の教科書で分からないところがあるので、英語の本があったら良いと思います。全体にいい図書館で、毎年本が増えるといいなと思います。

館長：今後検討させていただきます。

今日はありがとうございました。

「英字新聞が愛読誌」

一般利用者

水谷 貞夫



学校外への一般開放の利用者としての私の愛読誌は Asahi Evening News です。その記事の中でも BRIDGE コラムがお目当てです。このランプを使うゲームは西洋で大変盛んで、サマセットモームが「人間の考え出した最も知的で面白いゲーム」と称賛しているものです。丁度日本の新聞に碁や将棋のコラムがあるのに似ています。私は広島中国新聞文化センターで毎週1回これを教えているので参考になります。

この図書館はゆったりと利用させてもらえるので、有難いと思っています。学習塾の数学の講師もしているので、参考書が同じものが多数あり重宝しています。新聞・雑誌も見せてもらっていますが、もっと余裕の時間を作って小説を始め文学書も読みたいと思っています。

図書館には、次の新聞を備えていますので、ぜひご利用下さい。

和文誌

朝日新聞・毎日新聞・中国新聞（朝・夕刊）
日本経済新聞・日刊工業新聞・日本工業新聞
科学新聞

欧文誌

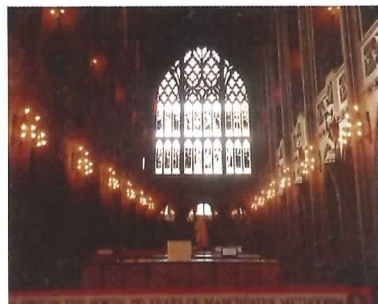
Asahi Evening News・Mainichi Weekly
Berita Harian

在外研究員だより

「マンチェスター
の図書館」

建築学科
篠部 裕

(マンチェスター大学
客員研究員)



ジョン・ライランズ図書館

ここでは、イギリス・マンチェスター市におけるいくつかの図書館について簡単に紹介してみたい。

1851年創立のマンチェスター大学はイギリスにおける大規模大学のひとつであり、大学全体の図書館としては、キャンパス内とシティセンターの2ヶ所に図書館を持っている。本館に当たるキャンパス内のジョン・ライランズ・マンチェスター大学図書館は、マンチェスター大学構内の中心部に位置し、イギリス国内の大学図書館としても3番目の規模を誇る。大規模図書館ではあるが、各専門書毎に簡単なインデックスをまとめたブックマークガイドが用意されており、初めての来館者でも広い図書館の中で自分の必要とする図書の把握が容易になっている。また、リフレッシュするための休憩室としてのカフェも備わっており、昼時やお茶の時間になると多くの学生が利用しているようだ。

一方、シティセンターに位置するジョン・ライランズ図書館は、本館の現代建築に対して、本格的なゴシックデザインの建築で、その内部は教会をもイメージさせる。同図書館は、本館の一般的な図書に対して、イギリス史、技術史、教会史などの史料を中心とした収集されている。私がこの夏、訪れた時には、図書館内の展示ホールを利用して「プリンストン・チャーチル展」が開催されており、チャーチルに関わる貴重な手紙や写真等が展示されていた。

私が客員研究員として所属する芸術学部建築学科については、建築・計画学棟の1階に、美術史学、建築学、計画学、考古学のための専門書を扱った芸術学部独自の図書館の一つとしてカントロピック図書館がある。論文、専門書、専門誌、ニュー

スレーターなどの他にも、芸術学部の図書館だけあって、写真コレクションなども充実している（絵画・彫刻等については、大学が独自に運営するウィットワース美術館があり、こちらのコレクションもなかなかのものである、入場無料）。

マンチェスター市の公立図書館であるマンチェスター中央図書館は、シティセンターに位置し、歴史的には1852年から公共の図書サービス（無料開放）を始めている。現在の図書館は、1934年に建築家ビンセント・ハリスの設計によって建てられたもので、完成当時は公共図書館としてはイギリス国内で最も大きなものであった。現在でも国内の大規模公共図書館の一つに位置づけられている。この図書館は建築としても大変興味深いもので、建物の中央部には3層に及ぶ巨大なアトリウム（トップライトをもつ吹抜け空間）の閲覧室があり、ゆったりとした気持ちで本を読むことができるようになってきている。また、円形の外観は、マンチェスター市の代表的なランドマークとなっており、列柱の並ぶ玄関は市民の待ち合わせの場所ともなっている。施設内容の特徴としては、EUの加盟国らしく、EUに関する情報コーナーもつくられている他、ブックショップやカフェなども備わっており、ソフトな利用ができる施設となっている。

以上、マンチェスター市における主ないくつかの図書館を簡単に紹介してきたが、こちらの図書館は図書や情報の提供だけでなく、お茶でも飲みながら学生や市民が気軽に利用できる（立ち寄れる）ような場所づくりも併せて工夫されているという私の印象を記して、私の図書館紹介を終わりたい。



マンチェスター中央図書館

新 着 図 書 10 選

「感性と情報処理—情報科学の新しい可能性」
日本学際会議編 共立出版

「人間の文化は、言語によって作られたが、その根底にイメージがある」「顔の表情をコンピュータで扱う」「ランダムドット・ステレオグラムのような目の錯覚」「ロボットに対する信頼感の実験」「音声処理によるコンピュータとの対話」などがあります。インターネットで日本顔学会 (<http://www.hc.t.u-tokyo.ac.jp/jface/>) ランダムドット (<http://www.webcom.com/kondo/>) も見て下さい。

感性とは何かは、同じ新着の「感性の科学」(辻三郎著サイエンス社) でどんな研究が行われたかを見るのが早道だと思います。

(辻 昭雄記)

「ソーラーカー製作ガイドブック」
米田裕彦〔ほか〕著 パワー社

本書は、ソーラーカーを製作し競技に参加するまでのハウツー本の一つであります。数ある類似の本に比べ、工業高校の教師らにより執筆されたものであり、大会に出場するための実用的な内容が細かく記されています。実際に本書の車体設計をもとにプライベートチームにより製作されたソーラーカーは、多くの大会で見られます。皆さんもプライベートチームを作って自分たちのアイデアを実現するために、本書を参考にいろいろな大会でチャレンジしてはいかがでしょうか?ただし、大会に出場したいという強い「熱意」も必要です。

(野村 高広記)

「極める HTML Tip テクニック」
大島 智樹著 秀和システム

インターネットを覗いてみると、実に多様でカラフルなホームページを見る事ができます。自分でホームページを作るためには、HTML という専用の記述言語を覚える必要があります。この本はホームページ作りでよく使う命令を中心に書か

れており、作成例や画面の写真など見やすく書かれています。また、索引での機能別の命令検索もやりやすくなっています。

(横沼 実雄記)

「絵解き電気機器マスターブック」
野口 昌介著 オーム社

高専に入って大変なのが実験とレポートだと思います。電気工学科の3, 4年生から「図書館に行っても専門書が難しくて(たくさんあって)、どこを参考にするのかわからない。」という声をよく聞きます。この本は、電気機器の主要な特徴や特性を、挿絵やグラフなどでわかりやすく説明しており、内容も十分です。専門書と併せて見る事で十分な理解が得られるでしょう。

(横沼 実雄記)

「AT互換機組み立て本 '97年版」
田中正造〔ほか〕著 ソフトバンク
「AT互換機活用マニュアル」
春田 浩一郎・大石 誠著 技術評論社

パソコンの購入を考えていても高くて手が出ない人には真に必見もの、是非2冊合わせて読んで欲しい本です。内容は、前者の方は主にAT互換機(いわゆる Windows マシン)の部品購入先、購入方法、組み立てからセッティングまで、後者はセッティングから実際にソフトを走らせての活用などが紹介されています。読めばわかりますが、組み立ては結構簡単です。

(横沼 実雄記)

「新編土木工学講座・(新版)土質工学」
中野担〔ほか〕著 コロナ社

土質工学の基礎理論から応用までわかりやすく書かれ、初心者、学生、実務者にもと幅広い層を対象に図式を多用し、説明されている。

演習問題も実例を挙げ、理解の助けとなっている。

(小堀 慈久記)

「ビジュアル版西洋建築史—デザインとスタイル」
長尾重武〔ほか〕編著 (丸善)

「図説近代建築の系譜」
大川三雄〔ほか〕著 (彰国社)

ここ数年の間に、西洋建築史及び近代建築史に関する概説書が何冊か出版されている。例えば、藤森照信著『日本の近代建築(上・下)』(岩波書店, 1993), 鈴木博之他著『新建築学体系5 近代・現代建築史』(彰国社, 1993), 熊倉洋介他著の『西洋建築様式史』(美術出版社, 1995), 長尾重武他編著『ビジュアル版西洋建築史—デザインとスタイル』(丸善, 1996), 大川三雄他著『図説近代建築の系譜』(彰国社, 1997)などがあげられる。概説書とは言え、いずれも最近の研究成果や新しい研究分野の内容も盛り込まれるなど、内容が豊富である。それに写真や図が多く取り入れてあり、読者が理解しやすく親しみやすいように工夫がなされている。しかも巻末には必ず参考文献欄が付いており、もっと詳しく知りたい時には大変役に立つ。

上記のうち『ビジュアル版西洋建築史—デザインとスタイル』、『図説近代建築の系譜』の二冊は最近、図書館に入りました。これらは特に図や写真が多く楽しみながら読めるので、大いに利用してください。

(岡本 二郎記)

貸出図書ベストテン

(1997年1月1日～1997年9月30日)

- 第1位 電気機器1 (応用電気工学全書1)
- 第2位 バック・トゥ・ザ・フューチャー2
- 第3位 回転電機工学
- 第4位 封神演義 上
- 第5位 標準電気機器講座1:同期機
- 第6位 封神演義 下
- 第7位 銀河英雄伝説1:黎明篇
- 第8位 星のない街路
- 第9位 電気機器工学2 (電気学会大学講座)
- 第10位 最新同期機

お知らせ

図書館ホームページからの リンク更新について

図書館ホームページから次のホームページへのリンクを追加しましたのでお知らせします。

▶学術情報センター電子図書館サービス◀

学術情報センター(NACSIS)が電子図書館サービス(NACSIS-ELS)を開始しました。

電子図書館サービスとは、学協会の発行する学術雑誌のページを画像データとしてデータベース化し、書誌情報から検索できるようにした情報サービスです。

収録雑誌・利用申請等詳細は、学術情報センター「電子図書館サービス」のホームページをご覧ください。

▶総合目録データベースWWW検索サービス (NACSIS-Webcat・試行サービス)◀

学術情報センター(NACSIS)が総合目録データベースWWW検索サービス(NACSIS-Webcat)を開始しました。

総合目録データベースWWW検索サービスとは、全国の大学・高専・研究所が参加、作成している図書・雑誌の書誌・所蔵目録です。

呉高専のOPACになれば、このWebcatで他大学・高専の書誌・所蔵を探すことができます。

▶国内・国外規格関係のホームページ◀

日本規格協会においては、平成7年よりホームページの開設が進められています。また、海外でも平成8年にISO(国際標準化機構)とANSI(アメリカ規格協会)がホームページを開設しています。機関の概要、整合化、標準化、書誌情報などを見ることができます。

▶(社)著作権情報センター◀

初心者向けの「著作権講座」から、最新の著作権に関する情報・法令まで詳しく知ることができます。

図書館では、10月より入退館システムの運用を開始しました

入退館システムとは、

入館システムで入館資格有無を自動チェックし、
退館システムで図書の不正持ち出しの自動チェックを行うものです。

利用方法は、

- － 入館ゲートで、「図書利用票」のバーコード部分を奥にして差込み口に入れてください。
(写真右・「入館システム」)
- － 「お通り下さい」と表示されたら、ロックが解除されますので、「図書利用票」を抜いて、お通り下さい。

面倒ですが、入館ゲートではひとりずつ「図書利用票」を読ませてください。

今後は、

- － 「図書利用票」を持っていない人は、入館できませんので注意してください。
- － 貸出手続きを済ませた図書は、自由に館内への持ち込み、持ち出しができます。
- － 今までのように、カウンターで預けたりする必要がありません。



図書館入退館システム



図書館入館システム

編集後記

「図書だより」を今年度から年1回の発行に替え、少し読みやすいものにしようと頑張ってみました。が、如何だったでしょうか。

インターネットで情報検索の出来るコンピューターも6台ほど設置しましたし、入退館システムも入り、図書館をさらに充実させていくつもりですので益々利用して下さい。

(図書館長 正野崎 昭二)